

氏名	北村 明子
ヨミガナ	キタムラ アキコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第341号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 F. リストの自作歌曲ピアノ編曲作品における演奏解釈 〈演奏〉 リスト：《歌の本》第1巻 ローレライ 第2稿（A97-1, 7'00）ほか

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	渡邊 健二
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	角野 裕
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	大角 欣矢

（論文内容の要旨）

本論文は、フランツ・リストの自作歌曲ピアノ編曲全作品における演奏解釈を導き出す試みである。

リストの自作歌曲ピアノ編曲作品は、《愛の夢》第3番や〈ペトラルカのソネット〉以外はその存在すら十分に知られているとはいえない。オリジナルのものよりも編曲を低くみるという20世紀の考え方も、研究が少ない要因の一つであろう。本論文では、これらの全作品を扱い、考察を通じてその全体像を明らかにした。また、演奏家の立場から、目指すべき演奏スタイルを導き出すことを研究の目的と定め、詩の解釈および歌曲との比較を通して演奏解釈に至るまで論じた。リスト本人の表現の仕方を深く読み解くことにより、オリジナルのピアノ・ソロ曲の演奏に生かす方法も提示した。

第1章ではリストの自作歌曲ピアノ編曲作品について概観した。リストは膨大な量の作品を書いたが、ピアノ時代にはピアノ曲、ヴァイマル時代には交響詩とこれまでの作品の改訂、ローマ時代以降は宗教的声楽曲へと、作曲の中心が移行する。音楽の特徴としては、詩的想念の重視、伝統的な形式からの解放、和声上の革新などが挙げられる。本研究に際して、後に改訂されたピアノ曲や没後長らく未出版だった作品も扱ったが、これは「リストの創作の全体像を明らかにする」という今日のリスト作品の捉え方を踏まえたものである。編曲は音楽史のすべての時代にわたって数多く見られ、リストの時代において編曲とオリジナルの優劣という感覚はなかった。リサイタルを創始したリストは、さまざまなジャンルから成る伝統的な演奏会プログラムをピアノ1台でこなし、他の作曲家の作品を広めるために編曲を行った。コスモポリタンであった彼は、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ハンガリー語、ロシア語、英語の詩による歌曲を作曲する。1839年から歌曲を作曲し続けたが、ヴァイマル時代にその約半数を改訂している。ピアノ曲に編曲した自作歌曲は24曲で、原詩の言語はドイツ語、フランス語、イタリア語、ハンガリー語である。他のジャンルと同様、自作歌曲にもたびたび改訂を行ったが、それは演奏者が演奏しやすく効果的にする等の目的で行われた。リストは他者の歌曲をピアノ編曲した経験から、自分の歌曲の中から気に入ったものをピアノ編曲し始めたこと、自作歌曲をピアノ曲へと編曲したのは、自身の曲を世に広めるため、ピアノという楽器の可能性を探求するためであることも本章で明らかにした。

第2章では、リストの自作歌曲ピアノ編曲作品全24曲について考察を行った。提示した成立過程からは、第1章で論じた特徴をより具体的なものとして捉えることができる。各曲の演奏に生かすために始めた原詩の解釈からは、リストが自作歌曲を作曲・編曲する際の、元になった詩による一定の傾向が判明した。彼は愛をテーマにした詩の多くにAs-durを用いている。ドイツ語のもの、特にゲーテ、リュッケルトの詩は、原詩や原曲に忠実に作曲・編曲し、フランス語、イタリア語のものは自由に創造的に作曲・編曲されている。リストがヨーロッパ各国の国民的な様式に深い関心を持っており、音楽におけるそれぞれの国の伝統に取り組んだことを実感した。また、各曲の歌曲稿とピアノ稿の比較から読み解いた、強弱、テンポ、リズム、音高の変化など、ピアノという楽器で歌曲のような表情を効果的に生むさまざまな工夫を明示した。論じ

た演奏解釈は、考察と練習の過程で現れてきた筆者の心理的・肉体的変化を詳細に記録していった結果導き出されたものである。リスト作品の演奏には多様な表現が求められること、リストの意志を汲んだ豊かな表現を実現するために指先から腰に至るまでの人間の体の動きの可能性を最大限に活用することの重要性を改めて実感した。

歌曲編曲作品を演奏する際は、歌のメロディーと伴奏を明確に弾き分けることが肝要である。第3章では、第2章での考察に基づき、リストの超絶技巧の面と同様に重要であるカンタービレの部分に注目し、リストの自作歌曲ピアノ編曲作品の演奏解釈を彼のオリジナルのピアノ・ソロ作品の中に生かす方法を提示した。オリジナルのピアノ・ソロ作品に、自作歌曲ピアノ編曲での技法が使われていることが確認できた。自作歌曲ピアノ編曲作品は歌詞があることで具体的なイメージを持つことができるが、ピアノ・ソロ曲においても似ているものに共通のイメージがあり、純器楽曲でも具体的な表現ができるのである。

リスト作品に内在している詩的な背景を読み解き、具体的にイメージすることは、演奏者の弾き方、聴き方の工夫をより高度なものに導き、リストのメッセージをより明確に聴衆に伝えるものとなるであろう。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、フランツ・リストによる自作歌曲のリスト自身によるピアノ独奏用編曲23曲について考察し、演奏解釈を導き出す事を目的としたものである。そもそも、リストの歌曲自体、その全てが人口に膾炙しているとは言えないが、リスト自身によるピアノ編曲全23曲について、全てを網羅した研究が行われたのは恐らく初めてであり、独創的で価値の高いものである。

評価すべき点は以下の通りである。(1)リストの自作歌曲のピアノ編曲を(未出版のものも含め)すべて検証し、このジャンルの全体像を初めて明らかにした。(2)可能な限り網羅的に現存の楽譜資料(自筆譜・出版譜)をリストアップし、アクセス可能なものについては比較照合し、成立年代、出版情報などのデータを整理した。(3)対象曲すべての歌詞の内容を検討し、歌曲稿とピアノ曲稿間(それぞれ複数ある場合はその各々について)の異同を検証した。(4)独・仏・伊語の歌詞につき、各国語の文学研究者の指導の下、詩的的確な解釈とそれに基づく試訳を行った。(5)博士リサイタルその他の機会に、声楽家に共演を依頼して原曲の歌曲伴奏を行い、歌曲の演奏表現につき実践的な経験を積んだ。(6)以上を踏まえ、全曲について詳細な楽曲分析を行い、歌詞解釈や歌曲伴奏の経験も活かしてピアノ独奏曲としての解釈や演奏技法について記述を行った。(7)リストのオリジナル・ピアノ作品の中で、これらの歌曲編曲で得られた解釈や奏法を応用できる箇所を指摘し、それについて考察を行った。

全23曲に亘って、改定稿も含め、歌詞と旋律や和声などの相関関係を細部まで研究する事で、リストが如何に歌詞に気を配って作曲・編曲や改訂を行ってきたかの経緯が明らかになった。ピアノのヴィルトゥオーゾ及び標題音楽の創始者として知られているリストが、創作に対し、実に細やかな気配りを以て当たっていた事を、作品研究及び演奏によって明確にした事は特筆すべき事と言えよう。また、歌曲編曲作品を研究する事によってもたらされた表現技術、特にカンタービレな奏法・表現について、リストの他の独奏作品演奏への具体的な示唆が、北村自身の豊富な言葉によるイメージと共に提示されている事も価値が高い。

論文全体を通して、演奏家としての主観性と、研究者としての客観性が高い次元で調和した、説得力があり、かつ、分かりやすく、優れた論文として高く評価できる。

学位審査演奏会では、リストの自作歌曲編曲による「歌の本」第1巻と第2巻が演奏されたが、全ての作品において、細部に亘って細やかな表現に満ちた、集中力の高い魅力的な演奏であり、技巧的な面が強調されがちなリストが、音楽表現について、繊細な感性を併せ持ち、多彩な表現を駆使していた事が浮かび上がる卓越した演奏であった。「歌の本」には幅広い音域での多声部の弾き分け、弱音での連続した和音の素早い移動など、表に出てこない難渋な箇所が幾つもあるのだが、全く意識させる事なく、作品の美しさを余すところなく表現したのは、演奏家としての力量を如実に表していた。

論文の書式等に関しては、欧文による資料、文献等の表記において若干の修正・追記等が必要である。しかしこれらは軽微な問題であり、全体としては極めて優れた研究成果を挙げたものとして、博士の学位を授与するに値すると判断される。